

新・瘠我慢慢の説

経済学者
渡辺利夫

【新連載】第二回 西郷擁護にみる福澤諭吉の義侠

福澤諭吉には「丁丑公論」という名説がある。丁丑は干支の一つで明治十年のこと、正式なタイトルは「明治十年丁丑公論」である。西郷隆盛は西南戦争により明治新政府にとって最大の逆賊となつてしまった。逆賊を擁護する者は誰もいない。そんなことでもいいのか。西郷が胸に深く秘めているのは士風、士魂である。これを失つてしまえば日本は危うい。西郷という人物についての福澤の考えを、西南戦争の直後に一気に認めた論説が「丁丑公論」である。こう切り出す。

「余は西郷氏に一面識の交もなく、またその人を

庇護せんと欲するにも非ずと雖も、特に数日の勞を費して一冊子を記し之を公論と名けたるは、人の為に私するに非ず、一国の公平を保護せんがためなり。方今出版の条例ありて少しく人の妨を為す。故に深く之を家に蔵めて時節を待ち、後世子孫をして今日の実況を知らしめ、以て日本国民抵抗の精神を保持して、その氣脈を断つことなからしめんと欲するの微意のみ」

脱稿は明治十年九月であった。しかし、西南戦争後、俄然、騒がしくなったジャーナリズムの弾圧のために、政府は「新聞紙条例」や「讒謗律」を公

布。いかな福澤といえども刑罰を覚悟せずしての公表は不可能であった。掲載は福澤の病没の前、明治三十四年二月の『時事新報』においてであった。

福澤は同紙を創刊して、ほとんど毎回のよう論説を書いたジャーナリストであった。が、福澤は、西南戦争の頃から賑わいをもせた日本のジャーナリズムに対してはきわめて批判的であった。西郷を戦争に巻き込んで自刃を強いた政府はこれを批判せず、一方的に西郷を逆賊として難じるばかりでいいのか。往時のジャーナリズムの低劣なありように憤怒をこめ、西郷の正当性を喝破したものが「丁丑公論」である。

「西郷の一条に至ては毫も斟酌する所なく、心底より之を悪み之を怒るが如くにして、啻に斟酌を用いざるのみならず、記事雑報の際にも鄙劣なる悪口を用い無益なる贅言を吐て、罵詈誾の事実に過るもの尠なからず」。このさまは「官許を得て人を讒謗する者の如し」といって、西郷を悪しざ

まにいう者たちの志の低さを嘆く。

人間には誰しも自分の思うようにことを進めたという心の動きがあり、これが「専制の精神」である。しかし、これを放縦に任せておくならば社会は活気を失って閉塞してしまふ。それゆえ専制の精神の一方には「抵抗の精神」をおき、そうして初めて社会のダイナミックな均衡が保たれるといふ。ところが近年の日本の状況を観察してみると「文明之虚説に欺かれて」抵抗の精神が次第に衰退し、専制への傾きが著しい。西郷が私学校生徒の暴走に促され政府軍との戦争に巻き込まれてしまったことは返す返すも残念だが、真にみるべきは西郷の心中に宿る烈々たる抵抗の精神に他ならない。

「実は人民の気力の一点に就て論ずれば、第二の西郷を生ずることその國の爲めに祝すべき事なれども、その之を生ぜざるを如何せん。余輩は却つて之を悲しむのみ」

西郷隆盛の名誉が回復されたのは明治二十二年の恩赦によつてであり、鹿児島城山での自決から

十二年後のことであった。福澤の西郷擁護が西南戦争直後であったことを思えば、氏の慧眼がいかにかりのものであったのかを知ることができる。

西郷に対する往時のジャーナリズムの論法はさまざまだが、福澤はこれをいくつかに分類し、それぞれに逐次反駁するという形で論を進める。そのうち最も重要なポイントは、西郷のような「武人の巨魁」に志を遂げさせるならば、不平士族が西郷のところに蟄集し、これが日本を混乱に巻き込む「文明の賊」となる危険性があるというものだった。福澤は、そんな主張は西郷が終始抱いていた「心事」をまるで理解していない者の愚説だといってこれを退ける。福澤はいう。

明治維新は時勢の然らしむるものであった。とはいえ、廃藩置県などという堅固な旧体制の破壊は西郷ほどの器量をもった人物なくしては到底不可能であった。旧制度の破壊を求めてこれだけの大事をやり遂げた人物が「文明の精神」を擁していないはずがない。西郷が士族を重んじているのはま

ちがないが、それは「封建世祿の旧套に恋々たる」がゆえではまったくない。

西郷が愛してやまないものは、士族の気風、士族の魂、すなわち土風、土魂なのだ。福澤はいう。西郷は旧制度を徹底的に破壊したけれども、旧社を支えた者たちの土風、土魂は、これを最も高潔なる精神だと認識していたではないか。このことこそが西郷の西郷たるゆえんだと福澤は主張する。福澤は西郷を次のように哀惜する。

「西郷は少年の時より幾多の艱難を嘗めたる者なり。学識に乏しと雖ども老練の術あり、武人なりと雖ども風采あり、訥朴なりと雖ども粗野ならず、如何なる大事変に際するもその挙動綽々然として余裕あるは、人の普く知る所ならずや。……薩の士人は古来質朴卒直を旨とし、徳川の太平二百五十余年の久しきも遂に天下一般の弊風に流れず、その精神に一種貴重元素を有する者と云うべし。……薩に居る者は依然たる薩人にして、西郷、桐野の地位に在るものにも衣食住居の素

朴なること毫も旧時に異ならず」

往時のジャーナリストとして著名な人物として、成島柳北、福地源一郎がいる。成島は新聞紙条例や讒謗律を厳しく批判、福地は西南戦争の激戦地田原坂の戦地取材にあたり、かつ福澤とも旧知の仲であった。しかし、西郷が官位を剝奪されるや、両者とも西郷を逆臣と言い募り、福澤はこれに激しい怒りを込めたのである。「丁丑公論」は福澤の義侠であった。

平川祐弘『昭和の大戦とあの東京裁判』（河出書房新社）が出版された。この著作は江藤淳『閉ざされた言語空間——占領軍の検閲と戦後日本』（文春文庫）とならんで、戦後日本の面妖な言説を徹底的に論じた名著として後世に残されるものとなる。

日本の報道関係者は、戦前期の日本軍の言論統制や内務省の検閲を非難して、自分たちには報道の自由はなかったとしきりに述べていた。そして戦後はGHQによる言論統制を受けてまた言論の自

由を失ったものの、しかし今度はそうは主張しなかった。講和条約が成立して日本が独立国家となってもなお占領軍当局の非を鳴らすことはなく、むしろそれに追従し、あげくは東京裁判史観が自分たちのものであるかのごとくに装い、そうして現在にいたる日本人の精神をその「内面」から呪縛してしまった。平川はこう主張する。

「連合国側は戦争に勝利しただけでなく、戦争の正邪を決する歴史戦においても勝利した。日本は二重の敗北を喫したというべきであろう。長崎の保守系の市長が、長崎に原爆が落とされたのは日本が悪かったからだ、口走ったとき、日本は精神的にも敗北したのである。情けないことである」

福澤のジャーナリズム批判と通じるものが確かにそこにはある、といわねばならない。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞受賞。